＝博士論文紹介＝

王菁洁　著『大正期の幸田露伴』

《論文構成》

序章

第Ⅰ部

第一章　『幽情記』の典拠考

第二章　「狂濤艶魂」考

第三章　「共鳴鳥」考

第Ⅱ部

第一章　「運命」における一人称の語り手―戦争部分をめぐって―

第二章　「運命」における一人称の語り手―「健文出亡」を中心に―

第三章　「ケチ」論―私小説との関わりから―

終章　大正期における露伴の文学観

明治期の理想主義作家として従来の文学史に位置づけられる幸田露伴は、「天うつ浪」の中断を経て文壇から遠ざかり、大正期には随筆、考証などの学術活動を多く行った。「運命」によって文壇復帰を果たすものの、この時期に執筆した文学作品は少ない。大正期の露伴作品に関する研究は近代性と典拠の問題について展開されてきたが、著者は典拠との詳細な比較と作品の精読によって露伴の創作部分をあぶり出し、露伴の文学観を抽出している。

文壇復帰以前の作品を扱った第Ⅰ部では、『幽情記』に収められた十三篇の作品の典拠が『情史』、『続本事詩』、『清名家小伝』等にあることを指摘する。『幽情記』のなかでも独自の作品世界を成すという「狂濤艶魂」と「共鳴鳥」をとりあげ、典拠との比較から、露伴が資料による歴史背景を利用し、意図的に創作をすることで立体的な人物造形を行ったと論じている。著者は、当時中国文学研究書と目されていた『幽情記』が、露伴の創作方法を示すものであり、自然主義文学が主張した事実性と、事実に縛られないロマネスクとを両立する新たな方法で、日露戦後の日本の人々に男女の情を通して「仁」を説いた作品群だと位置づけている。

文壇復帰後の創作方法の変化を検証する第Ⅱ部では、同時代の小説を意識しつつ新たな創作方法を提示したとして、「運命」の語り手と「ケチ」の私小説的要素に着目している。「運命」では典拠の意図的な引用によって創作する方法が用いられると同時に、歴史事実を語るように見せかけながらも、健文帝に寄り添う一人称の語り手「予」の主観によって資料が裁断される。この方法は事実として読まれる私小説の流行と関連するものだという。私小説的要素を備える「ケチ」では、社会現実を照射する方法として私小説の形を駆使し、文明開化がもたらした科学主義や合理主義が相対化され、近代化する日本社会への文明批評が行われていると論じている。

本論文は、露伴の博識が反映されたために難解な作品の典拠を精緻に検証すると同時に、作品の読み取りを通して、文壇から遠ざかっていたとされる露伴が、自然主義や私小説の流行を見据えながら、近代小説の概念から遊離し漢学由来の文学観によって自身の文学を打ち出したという、大正期の露伴文学像が提示されている。

（胸組芙佐子）